

---

---

## 巻頭言

# J.S. バッハの受難曲

毎年イースターの前になると、ヨハン・セバスティアン・バッハ（1685～1750）作曲による「マタイ受難曲」や「ヨハネ受難曲」のコンサートに恵まれる。受難曲には、文字通り新約聖書の四つの福音書（マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ）のそれぞれについて、聖典としてのテキストを尊重して作曲されたもの、四つの福音書の記述をまとめたもの、その他にも幾つかのタイプがある。バッハ以前にもシュッツの「マタイ受難曲」をはじめ、多くの作曲家による様々なものが残されている。

ところで、バッハはその生涯において「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」を含む受難曲を五曲、作曲したのではないかとされている。そのうちの一つについては、諸説あるもののいまだ正確なことはわからないのであるが、「マルコ受難曲」「ルカ受難曲」については、ある程度の記録と資料が残されている。特に「マルコ受難曲」については、初演が1731年3月23日であり、バッハの作品番号（BWV247）も付けられている。ただ、その後楽譜が散逸し、現在では全曲が揃った完全なかたちでは残されていないのである。「ルカ受難曲」に関しては、やはり作品番号（BWV246）が付けられてはいるものの曲の構成、様式、作風等あらゆる観点から再検討され、今では他の作曲家によるものをバッハが再演する際に写譜したもの、それに幾つかのバッハ自作の曲を加えただけのものであろうと言われ、バッハのオリジナル作品としては位置付けられていないのである。私自身、何度かこの「ルカ受難曲」をCDで聴いてみたが、謎はいつそう深まるばかりである。

バッハはルター派の敬虔なクリスチャンであり、音楽家としては人類史上いまだに並ぶものの無い存在である。その「マタイ受難曲」の演奏に圧倒されながらも、私は一方で、正真正銘ヨハン・セバスティアン・バッハの手による「ルカ受難曲」の楽譜が世界のどこかにまだ眠っているのではないかと、との思いにもかれるのである。偉大なる「マタイ受難曲」にしても、メンデルスゾーン（1809～1847）がその再演に漕ぎつけるまでの、メンデルスゾーン一家が辿った道のりに目を向けた時、世間からは一笑に付されるだけのような私の思いも、あながちただの夢物語だけでもないような、楽しみを伴うものになっていくのである。

研究が進み、いつの日かその再演が実現されるようなことがあるなら、楽しみにしたいものである。

聖学院大学 人間福祉学部児童学科長 村山 順吉

---

---